北海道医報
ISSN 0913-0217　2026.8.1. 第1295号
発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp
頒価 1部 275円（税込）

日本的OSの栄光と機能不全
――日本の深層構造――

情報広報部　山科　賢児

現代の日本社会を覆う政治の劣化、経済の長期停滞、そして日々の生きづらさ。これらは個人のモラル低下や政策の失敗によるものではない。社会の深層に潜む古い「日本的OS」が、今も静かに作動し続けているからだ。

「日本的OS」とは、法律や制度のような可視化された仕組みではなく、人々が無意識に共有する深層の行動原理（アルゴリズム）を指す。法律や組織は、その上で動く「アプリ」に過ぎない。どれだけアプリを入れ替えても、土台のOSが変わらなければ、社会の振る舞いは本質的には変わらない。

その原型は江戸期の共同体秩序にあり、明治の官僚制や戦時体制を経て、現代へと再編・増幅されてきた。しかし、この古いOSは、高速化と透明性、多様性が求められる今の社会の環境に適合できず、深刻な機能不全を起こしている。

日本的OSは、日常のあらゆる局面に特有の「バグ」として表れる。周囲との同調を当然のものとして異質な意見を「空気」によって排除し、成果よりも「どれだけ残業し、頑張ったか」という努力の量を評価の基準とする。そこでは前例やルールの厳守そのものが目的化して本来の合理性が置き去りにされ、意思決定の所在が曖昧なまま不条理だけが通り、改善の芽を摘んでいくのである。

こうした歪みは意図されたものではない。歴史的に蓄積されたルールが、オートマチックに作動した結果である。「真面目に努力しても報われない」という閉塞感は、個人の能力不足に起因するものではなく、思考と行動を規制する深層構造が生み出す必然の結果だ。

ただし、この日本的OSは決して愚かさゆえに誕生したわけではない。むしろ、かつては衝突を避ける知恵であり、国の一体性を保つ仕組みであり、正解のある産業社会を豊かにするための「超優秀な生存戦略」であった。当時は驚異的な成果を生んだ美徳が、正解のない現代において、変化を阻む致命的なバグへと反転したのである。

かつて機能していた美徳は、「ローカル通信LAN」のように顔の見える共同体の中でこそ快適に作動した。譲り合いや挨拶、近所の互助は、その通信環境があって初めて成立していた。しかし現代ではその環境が失われ、同調圧力と形骸化したルールだけが生き残っている。「守ってくれないシステムが、服従だけを強いる」――これこそが、現代の生きづらさの正体だ。

本来なら選挙や世論といった「内圧」による変革が期待されるが、日本的OSには、内部からの要求を無効化する強固なセキュリティプログラムが組み込まれている。責任の所在を極限まで分散・曖昧化させる構造のため、どれだけ現場からバグ報告が届いても、システムは「現状維持」を自動選択し、頑なに自己保存を図るだけである。

内圧の無力さは、歴史上、権利や自由を自ら勝ち取った体験の希薄さにも起因する。欧米の市民が革命を経て民主主義を勝ち取ってきたのに対し、日本の近代化は「上から与えられた初期設定」に過ぎなかったことにある。

歴史が示す通り、日本の重大なシステム更新は、常にペリーの黒船や敗戦といった外圧による「強制リセット」であった。そして今、現代の日本社会には「見えない黒船」が静かに押し寄せている。生成AIは前例主義の価値を揺るがし、グローバル資本は透明性と効率性、そして明確な責任を組織に求める。適応できない組織は、市場から静かに淘汰されるだろう。倫理的な批判には耐えられても、「経済的な死」をもたらす資本の論理からは、もう逃れられない。

容赦ない外圧によって日本社会は鮮やかに生まれ変わるのか。それとも、数百年かけて刻まれた古いOSと共に、緩やかに崩壊していくのか。

既存の権力構造は、どれだけ正当な圧力に直面しても自己変革を行わない。本質的な追及に対しては、執拗な「論点ずらし」や巧妙な「責任回避」の手法を駆使し、議論を骨抜きにしながら「変わったふり（過剰適応）」でやり過ごすだけだ。従来の日本的OSとは異なる行動原理を持つ新種のOSが、水面下で静かに増殖している。しかし、その影響は未だ限定的である。

だとすれば、私たちが取るべき合理的な選択は自ずと決まってくる。この社会の行く末を憂い、抗おうとも、達成不可能ともいえる「社会の根本改革」にエネルギーを注ぐのをやめることだ。壊れた巨大なシステムと付き合い、共に疲弊していく必要はない。

目指すべきは、危険な状況から距離を置いて安全な基地を確保し、新しいアルゴリズムを共有する仲間と連帯すること。社会の緩やかな衰退を冷徹に受け入れ、自分と大切な人をどう守り抜くか――。

この「冷徹で静かな個人の生存戦略」への思考転換は、社会からの逃避ではない。現実を直視した先にある、賢明な選択である。